

遺跡発表2. 佐倉市

うちだはやまこしいせき 内田端山越遺跡

— 須恵器工人のいた村に「寺」が建っていた? —

調査室長 大澤 孝

遺跡の立地

佐倉市内田端山越遺跡は、印旛沼から鹿島川を南へ約15km（直線距離約10km）遡った東岸の台地上に位置する。台地平坦部は、標高35~40mで、鹿島川から延びる支谷が複雑に入り組んでいる。

内田端山越遺跡は、その範囲は広大で、南北約1km、東西約1.3kmにわたり、南端の一部は千葉市にまでおよび展開している。

同じ開発事業予定地内には、宮内井戸作遺跡、宮内南台遺跡、宮内芋戸遺跡、西御門荒生遺跡、西御門新堤遺跡、西御門明神台遺跡、白池台遺跡、飯塚荒地台遺跡などが所在し、平成元年~平成15年まで発掘調査を実施した（本調査実施面積245,356）。

遺跡の概要

本遺跡は、民間開発事業地のゴルフ場造成予定地及び道路建設予定地にあたり、調査は、平成8年~平成15年、32回にわたり実施された。調査対象面積436,000、本調査実施面積100,188、保存面積200,001、135,811については確認調査で終了となった。

遺構・遺物については、旧石器時代から中・近世のものが検出・出土している。遺構および奈良・平安時代の主な出土遺物については次のとおりである。

◎遺 構

旧石器時代	遺物出土地点	13ヶ所
縄文時代	包含層（早期）	3ヶ所
	住居跡（中期）	13軒
	土坑	172基
	陥し穴	5基
	炉穴	1基
	焼土跡	2基

古墳時代	住居跡（後期）	13軒
	土坑	27基
奈良・平安時代	住居跡	202軒
	掘立柱建物跡	116棟
	土坑	234基
	ピット・小ピット	多数
	井戸	1基
	粘土採掘坑	5ヶ所
	須恵器窯	3基
中・近世	土坑	381基
	土坑墓	17基
	炭焼窯	121基
	焼土跡	2基
	溝状遺構	27条
	土手	1本
	区画溝	1条
	塚	1基

◎奈良・平安時代の主な出土遺物

土師器、須恵器、丸瓦、平瓦、硯、転用硯、置きカマド、墨書土器、刻書土器、刻印土器、香炉形土器（須恵器）、蔵骨器、青銅製品（巡方^{じゅんぽう}、^{だび}銚尾、鏡など）、鉄製品（鎌、刀子、クルリ鉤^{かぎ}、鋤先、紡錘車、釘など）、土製品（円盤、紡錘車、支脚、土玉など）、石製品（砥石など）

平成15年度発掘調査

4月7日~10月6日までの約6か月間にわたり、3H地点と5H-A地点・5H-B地点の24,587について本調査が実施された。

検出された遺構および奈良・平安時代の主な出土遺物は、次のとおりである。

◎遺 構

縄文時代	土坑	24基
奈良・平安時代	住居跡	44軒
	掘立柱建物跡	63棟
	土坑	48基
中・近世	小ピット	多数
	土坑	172基
	溝状遺構	6条
	小ピット	多数

◎奈良・平安時代主な出土遺物

土師器・須恵器・青銅製品（鏡、鉞尾）・鉄製品（紡錘車、鋤先、刀子、釘など）・土製品（紡錘車、土玉など）・石製品（砥石など）・その他（転用硯、墨書土器など）

以上であるが、5H-B地点に集中して検出されている。住居跡は、構築材を使用したカマドを有するものが多い。大型の住居跡は、遺物量も多いが、カマドも大きく単なる煮炊き用というよりは、焼き物の登り窯を髣髴させる規模・燃焼状態のものがある。遺物は、他地点より墨書土器が多い。

奈良・平安時代の遺構・遺物について

本遺跡については、平成9年度の道路建設に伴う調査の第1地点で粘土採掘坑（材料の採取）、工房跡（成形）、窯跡（焼成）と一連の作業工程を示す遺構が検出され、須恵器製作の体系が確立されていたことを予測した。

窯跡については、平成11年度のゴルフ場造成予定地に伴う調査のクラブハウス地点においても、検出している。また、平成12年度佐倉市の市内重要遺跡確認調査において窯跡分布調査・確認調査が実施され、台地の南側斜面部78,000を対象とする試掘調査と3,120の確認調査の結果3基の窯跡、2基の粘土採掘坑が検出されている。ちなみに、工房跡と窯跡の距離は10m程度である。

窯跡からの出土遺物は、杯、高台付杯、香炉、蓋、瓶、鉢、播鉢、片口鉢、円面硯、甕、甌、紡錘車、丸瓦、平瓦などで、甕が主体であり、時期は、8世紀第(協)四半期～9世紀前半と考えられる。

一方、多数検出された竪穴住居跡・掘立柱建物跡は、8世紀後半～9世紀前半と考えられ、集落跡と窯跡がほぼ同一の時期・期間含まれていたといえる。

また、平成15年度調査において住居跡同士の重複は少ないが（住居の建て替え、カマドの造り替えはみられる）、住居跡と掘立柱建物跡、掘立柱建物跡同士の重複がみられる。8世紀後半～9世紀前半という期間に住居と掘立柱建物の配置に数期の変遷が想定される。

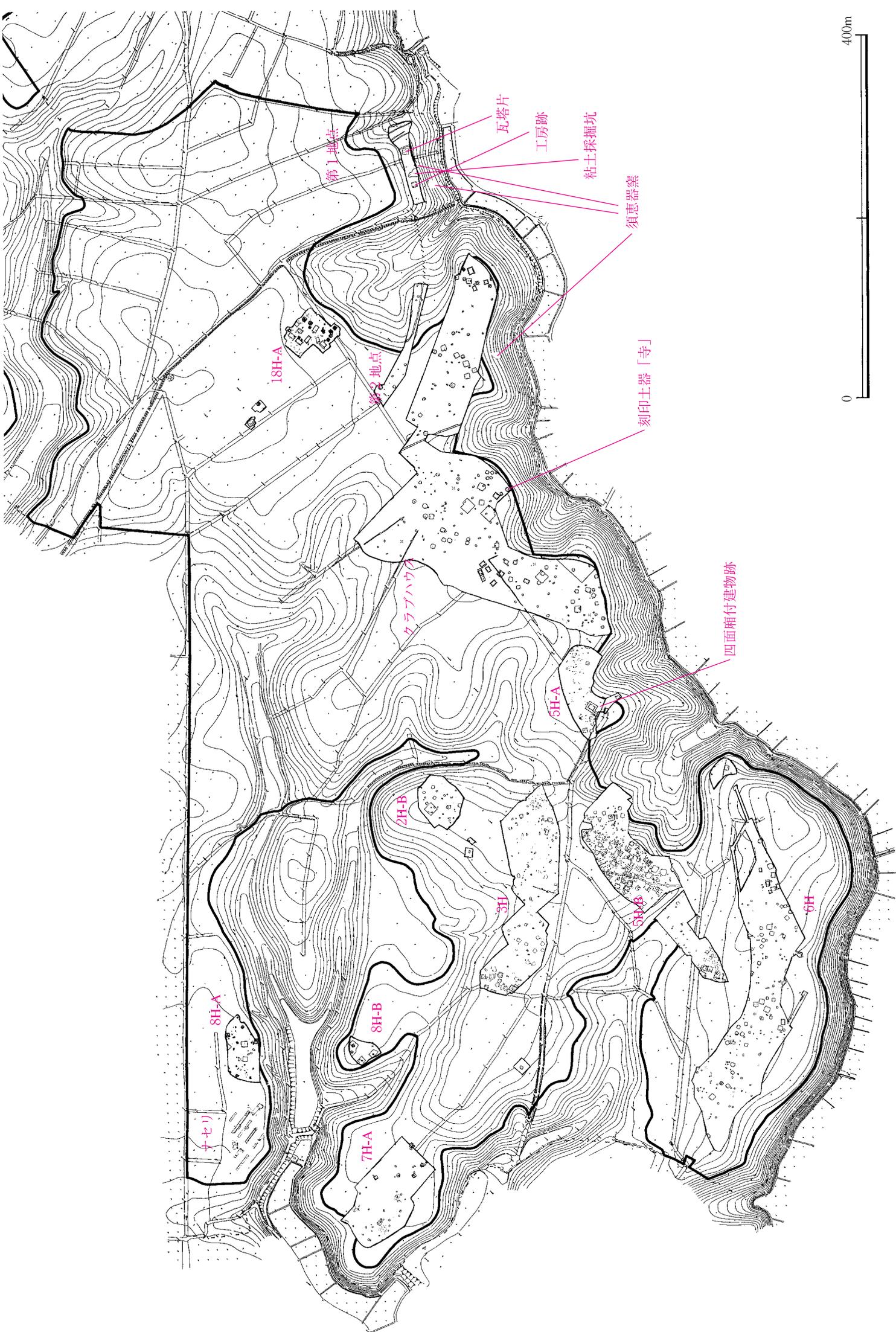
生産された須恵器は、集落内の使用だけではなく、周辺の村にも供給されていたと思われる。

平成9年度調査第1地点出土の丸瓦・平瓦、平成10年度調査4H-B地点出土の蔵骨器、平成11年度調査クラブハウス地点出土の刻印「寺」の須恵器杯・須恵器香炉形土器、平成12年度調査窯跡調査出土の刻印「寺」の須恵器杯片など、仏教に関連する遺物の出土があり、平成12年度調査の18H-A地点では、掘立柱建物跡の柱痕からの瓦の出土などもあった。

以前から本遺跡内に古代の寺が存在したという可能性が示唆されてきたが、平成15年度の調査でより確実性を帯びた。それは、四面廂付の掘立柱建物跡の検出である。遺跡からは多数の掘立柱建物跡が検出されているが、四面に廂を有する建物跡はこの1棟のみである。ただし、建物跡の周囲からは瓦が出土していないので、瓦葺の建物であったとは断定できない。むしろ、檜皮葺や板葺、萱葺であったのかもしれない。

墨書・刻書については、「方」、「古カ」、「千万」、「門」の他、「乙継」、「戒玠」など、人名と推測できるものもある。また、整理作業により、さらに仏教に関わる遺物として、平成9年度調査第1地点1号住居跡から、沈線が刻まれている瓦塔の基壇部と推定する破片が見つかった。

古代印旛郡の中心地から離れた、端山越村には、須恵器生産を行う工人集団が居住し、寺院というよりはむしろ、瓦塔を安置した堂が建てられ、人々は徐々に仏教を信仰の対象としていったのであろう。



内田端山越遺跡遺構配置図



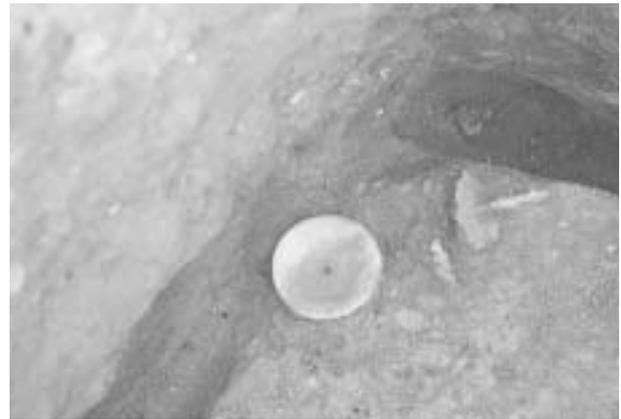
平成15年度調査分航空撮影 (5H-B)



5H-B地点 掘立柱建物跡群



5H-B地点 7号住居跡カマド



5H-B地点 7号住居跡出土遺物 (紡錘車)



5H-B地点 15号住居跡出土遺物 (転用硯)



5H-A地点 1号掘立柱建物跡 (四面廂付)



18H-A地点 調査区全景



18H-A地点 3号掘立柱建物跡瓦出土状況